

平成 18 年度 Stanford 大学海外研修に参加して

市立四日市病院
丹羽正厳

1. 期待していた事とその結果

私はこれまでに一般撮影、血管造影、CT を担当してきて、現在の研究もマルチスライス CT や C アーム式 CT が中心となっていました。そのため、今回の海外研修に対して CT や面検出 CT について知見を得ることが第一の目的でした。また、米国における病院の様子についても期待していました。そして今回、研修を終えた感想は、CT や血管撮影というモダリティに分けられた考え方というよりも、これからの放射線診断、放射線治療、さらには医学がどのように進歩していくかを考えるよい機会になったと思います。それは、fMRI や Molecular Imaging など、放射線医学と生理学、生化学などが高度に協力し合う世界が始まっているということでした。これは、Dr. Glazer や Moseley らの講義でしっかり理解できるものとなりました。今から数年後ではなく、10 年後、20 年後にどうなっているか、これが今回の研修の成果だと思います。

私にとって今回のセミナーは将来の放射線科学を考える機会を与えられたというのがもっとも大きなことです。現在の私にとって有用であった内容も多くありました。CT に関する講義「Cardiac CT」と「CT angiography and Perfusion」、3D ラボの見学です。特に、日本とは異なり 3D ラボの運営等では、3D 作成のプロトコル、CT 室や依頼医との意思の疎通など、多くの知見を得ることができました。

今回の研修で講義はありませんでしたが、私は I.I. を搭載した C アーム方式の CT について研究、学会発表をしたことがあります。ちょうど昼休みのとき、韓国からの留學生という大学院生と食事をすることができ、彼も同じ装置で研究をしているとの事でした。彼は画像再構成の研究、私はアーチファクトの研究をしていますが、理解し合えることがいっぱいあって、大変楽しい時間をすごすことができました。今から思えば、昼休みの時間が短くて、もっと話し合いたいと思ったぐらいです。しかし、後日、メールを送るという約束をとったから大丈夫です。このような機会があったのも、セミナーの初日に Moseley が言った「スタッフも一緒に」とおっしゃったように、多分、彼がスタッフに「ライトコートの人と話をするように」と言ってくれたものだと思います。

2. 得られた成果とそれをどう生かすか

今回の研修で得られたことは多くあります。第一に放射線科学の将来、そして 3D ラボを中心としたデータ管理、画像作成のシステムです。特に 3D ラボの運営については参考になることが多くありました。今後、本院での 3D ラボ開設に向けて役立てていこうと思います。また、C アーム CT を研究中の大学院生とも連絡を取り合って研究を内容のあるものにしていきたいと考えております。

3. 最も印象に残ったこと(セミナーとイベント)

今回の研修で最も印象に残ったことは、セミナーでは 3D ラボの見学でした。とくに、最初の見学で質問しきれずにいたことを十分な時間をかけて聞けたことは大きな成果でした。イベントでは、宿舎で多くの他モダリティ研究の先生方とお話できたことです。特に、宿舎での生活は新鮮なものでした。セミナー後の毎日、何をするんだろうと思っていましたが、時間が足りないくらいで充実したものでした。特に、辻岡先生が講義された「CT やヘリカルスキャンの開発の話」「英語発表術の話」は多くの参加者に役に立ったものと思います。

4. 今後の海外研修に期待すること

今回の海外研修ですが、Stanford 側のセミナー内容は私の専門とする CT、アンギオではありませんでしたが、最先端の放射線科学を知ることができた大変有用でした。また、今回感じたことは参加者メンバーが大変よかったことです。各モダリティのベテラン、若手がそろって大変充実したものになったと思います。今後もこのような企画を続けていってほしいと思います。



ライトコートでの昼食 韓国からの留學生(左)と筆者